

# 大正後期・昭和初期における 広池千九郎のモラロジー普及活動

山田 順

## 目 次

- 一、はじめに
- 二、大正後期における社会と教育状況
- 三、大正末期におけるモラルサイエンスの普及活動
- 四、昭和初期における社会と教育状況
- 五、昭和初期におけるモラロジーの普及活動
- 六、まとめに代えて

## 一、はじめに

広池千九郎が、長年にわたって蓄積した学識と自らの宗教的体験をもとにして、人間の生きる道と社会のあり方についての考察を深め、「モラルサイエンス」の研究を大成したのは大正末期のことであった。当時の我が国は、戦後恐慌と不況の慢性化にともなって社会体制の不安が濃厚になる情勢にあった。昭和三年、広池は心血を注いで著した『道徳科学の論文』を出版して、いよいよ緊迫の度を深める社会に向けて、モラロジーおよび最高道徳の必要性を訴えんがために東奔西走の努力を開始した。

広池千九郎は、モラロジー普及の基本的な方法として、まず第一に、モラロジーの研究を大成すること、第二に、正式の学校教育に委任すること（モラロジー大学を新設するとともに、漸次世界の諸大学の講座ならびに師範教育に及ぼし、ついに中等及び初等教育の徳育に普及すること）、第三には補助的方法として、社会教育にも委任すること（一方にはアカデミーを設け、他方には篤志の個人、教育会・軍人会・青年会・婦人会・赤十字社社員、その他官衙・会社・工場もしくは商店等の団体教育に対してその団員の精神を最高道德的に開発すること）を示している（『道德科学の論文』第八冊、広池学園出版部、昭和六〇年、一五〇頁～一五一ページ。以下「論文」⑧と略記）。そして、

モラロジー教育の第一歩は、学校教育においても、社会教育においても、まずモラロジーの原理を各人の理性に訴えてある程度までその理解を求むることを主とするのであります。これがすなわちいわゆる「思想の善導」であるのです。すなわち最高道德の原理が、ある程度まで現代の人に一の知識として理解されるに至らば、従来ありふれたるところの学問・思想・道德もしくは信仰が人類の発達及び幸福の原理に一致せざることを発見するだけの能力を生ぜしめ得るでありましょう。万一、モラロジーの教育がかくのごとく現在における世界人類の思想の善導に貢献することを得ば、ただそれのみにもその価値はすこぶる偉大なものでありましょう。然るをいわんや、そのモラロジーの原理を理解せしものの中より、一人でも最高道德の实行者を生ずるならば、モラロジーの教育の価値はいっそう偉大なことでありましょう。

（『論文』⑧、一二二ページ）

と述べて、『道德科学の論文』発行当時においては、広く社会一般に向けた思想の善導が急務であると考えていた。

さて、その広池千九郎が没して五十年を数える今日、そのモラロジー普及活動の進展状況はどうであろうか。

モラロジー研究所が五年前の昭和五十七年に実施した「モラロジー教育調査」の報告書によると、「モラロジーが学問として一般社会に通用するようにすること」と、「一般社会に対して広く思想善導・啓蒙活動を行なうこと」についての期待、つまりモラロジーおよびモラロジー団体の社会的認知の向上に対する期待が大きいことが読みとれる。

そこで、本稿では近年刊行された『広池千九郎日記』（広池学園出版部刊）をもとにして、広池がどのようにしてモラルサイエンス、のちにはモラロジーを社会一般に普及していったのか、当時の社会教育の状況をふまえてその歩みをたどって、その普及活動に対する方針の一端に関して若干の考察を試みるものである。なお、本稿では、便宜上、大正八年から昭和六年の間に限って取り扱い、さらにこの時期を二期に分けて述べることにする。

## 二、大正後期における社会と教育状況

広池千九郎の大正末期におけるモラルサイエンスの普及活動の歩みをたどるに先立って、まず大正後期当時の社会および教育をめぐる状況について以下に概観しておきたい。

大正時代の社会の人心に衝撃を与えた二大事件としては、大正三年の第一次世界大戦参加と、同十二年の関東大震災の二つをあげることができよう。

第一次世界大戦の進展は、それまで行きづまりを見せていた我が国の資本主義に潤いをもたらしたが、他面では世界思潮の影響を受けて、国民の思想は絶えず動揺していた。すなわち、第一次世界大戦後の社会情勢には著しい変化が見られた。大正九年三月の大恐慌以後に不況が慢性化した一方、個人主義的、自由主義的、国際主義的な思想が普及し、「大正デモクラシー」が一世を風靡した。そして、経済的な行きづまりから労働争議や小作争

議が続発し、無産政党の結成や普選要求運動が発展していった。加えて大正十二年、東京に破滅的打撃を与えた大震災は、国民生活を物質的精神的荒廃へと追いやった。

このような社会体制のゆらぎに対する国民の不安が一段と高まる情勢のもと、国内体制の補強諸方策が次々と打ち出されていった。それは、教育にも色濃く反映した。とくに、大正末期における関東大震災後の機会をとらえて、社会的不安動揺を鎮め風教を振興する旨の「国民精神作興に関する詔書」が出され、治安維持法の制定とともに民主主義・社会主義の思想および社会運動を禁圧する方策が進められていった。

文部省は、大震災後の九日に教育上の臨時措置を規定し、注意を告諭した。そのうえで、十一月十七日には国民精神作興に関する詔書発布にもなつて教育関係者に聖旨貫徹方を訓令した。そして、翌年の大正十三年四月十五日、その趣旨を教育制度上に具体化するために、内閣に「文政審議会」を設置した。これは、主として国民精神の作興、教育の方針等を審議するのを目的としたもので、教育界のみならず、学界・実業界等あらゆる方面の権威者を集めた大規模な教育審議機関であった。

社会教育分野に関係しては、大正期に入つて国家的な利害に対する関心を高めようとする講演会が増えてきたことが注目される。大正六年、「臨時教育会議」が設置されたが、その最大の目的は、教育を通じて国民の意識を統一し、第一次世界大戦後の精神的基盤を確立することにあつた。臨時教育会議は、教育制度全般にわたつて、天皇・国体に対する意識と国家社会に対する責務の高揚を基調とする、いわゆる国家主義教育を徹底する方針を提示したが、とくに「国体観念」「国家思想」「忠君愛国ノ志操」などの涵養が強調された。

そして大正六年から八年にかけて、内務省は第一次世界大戦後の民主主義思潮の高まりを防止し、国体の精華の観念や犠牲精神を涵養するための教化活動に力を注いだ。すなわち、大正七年十二月二十四日、「臨時教育会議」

が「通俗教育ノ改善」と奨励のため、その具体策を首相に答申したことを受けて、公開講演会及び講習会を頻繁に開催するようになった。これ以来、同九年度中には、直轄学校二十校に命じて公開講演会及び講習会を二十八回も開き、その成果もみるべきものがあつたようである。同十年度以降にもますます盛んに行なわれ、同十二年ごろになると各府県でもこれにならつて、中等諸学校で「公民講座」「社会講座」を巡回開設するようになった。そこで十二年度からは、組織的な教育を施すことにして、正規の学校教育を受けなかつた成人で商工業に従事しているものを対象に、成人教育講座を毎年開設することになった。

たとえば、大正十二年十月三十日、第一回の文部省成人教育講座が大阪で開催されたが、このとき商工業従事者ら四百二十四名の参加者が、翌年一月三十一日に至る十週間、週一回三時間ずつ、思想問題や商事要項などの講義を聴講した。こうした成人教育講座の形式が確立し、以後、同様の講座が毎年各地で開催されるようになった。それらの講義内容の柱は、「公民教育」と職業教育であり、公民教育については、各会場の講座中に必設し、現代思想に対して堅実なる指導を与えるものとして重視された。こうして講座は、広範な成人層を組み入れることによつて、時局に対応した思想善導の機能も果たしていたと考えられる。

#### ◇参考

- ・ 尾形裕康著『日本教育通史研究』、早稲田大学出版部、昭和五五年、二四八ページ、二六三ページ、二六九ページ。
- ・ 海後宗臣監修『日本近代教育史事典』、平凡社、昭和四六年、一四ページ。
- ・ 国立教育研究所編『近代日本教育百年史』第一巻、昭和四八年、二七四～二七五ページ、二九五ページ、三一八～三一九ページ。

・ 松本憲著『社会教育概論』、学文社、昭和五五年、二七ページ、三一～三二ページ。

### 三、大正末期におけるモラルサイエンスの普及活動

以上に概観したように、広池千九郎がモラルサイエンスの内容を固めつつ、その普及を図ろうとした時期は、日本の社会全体が不安な様相を募らせていたころであった。この思想の混乱した時期にあつてこそ、ますます世人にモラルサイエンスの必要なことを痛感する広池であつたが、その普及に当たっては極めて慎重な動きをとっている。

#### (一)普及の成果をあげた講演会の一覧

そこでもまず、広池千九郎がモラルサイエンスおよびその後のモラロジーの普及に当たって、自らがその成果を認めた講演会について次に一覧しておきたい。広池は、昭和六年十二月発行の『道徳科学研究所紀要』（「旧紀要」と略す）第一号に、それまでのモラロジー普及活動の歩みを振り返って、次のように記載している。

私は新科学モラロジー建設のために全力を注いでおれどその研究の傍ら内外における産業および経済の實際上の事情を調査することと労働問題の道徳的解決に向かつての努力と世界人心の最高道徳的開発とにつきては常に絶えず尽力しておつたので、年来大小の講演会に臨むこと枚挙に遑なきほどであります。後日備忘のため、その中につきて近年わが日本における各方面の首脳部および準首脳部階級に向かつて開きたる講演会の主なるものを左に列挙致しておきます。

- ①大木伯爵主催、大正八年十一月二十二日および二十三日の両夜連続的開講、華族会館において。
- ②大木伯爵、阪谷男爵、和田豊治、井上準之助四氏主催、大正十年十二月十三日夜、華族会館において。

③大木伯爵主催、大正十二年七月十日夜、華族会館において。  
右①③は主として政界の巨頭、親任級および勅任級の官吏を招待す。②の時にはこれに実業界の巨頭を加えて招待す。

④朝鮮総督齋藤美子爵主催、大正十一年四月十八日以降数回に亘り朝鮮総督府および総督官邸において総督府官吏並びに内外有力者招待。

⑤昭和二年六月十七日、当時新築の華族会館において徳川達孝伯、柳原義光伯、酒井忠正伯、渡辺千冬子、大寺純蔵男その他の方々に対して一場の講話をなす。

⑥中島男爵主催、昭和三年十月二十五日、東京における日本工業倶楽部の経済研究会にて同会員を招待す。その演題は「階級制度の科学的研究および労働問題の科学的解決」というのであった。

⑦昭和三年十二月二十七日、鈴木海軍軍令部長のご希望に依じ、右軍令部において大佐以上の方々に講話す。  
⑧大川平三郎、藤原銀次郎、白石元治郎、中野金次郎四氏主催、昭和五年二月十九日、日本工業倶楽部において同倶楽部員を招待す。その演題は「労働問題解決の原理並びに労働組合法制定の可否につきて」というので、浅野総一郎氏はじめ東京実業界の主なる人々およびその代理者四百余人参集したり。しこうしてこの講演はその結果より見て我が国の資本家に対し非常なるショックを与へたるを覚ゆ。

⑨昭和六年一月二十六日、香川景三郎氏はモラロジーの写声レコードを携えて渡鮮、齋藤総督に会見の結果、同総督府機関新聞京城日報社にて写声講演会開会。

⑩昭和六年四月二十四日、朝鮮裡里大橋農場主大橋与市氏のご希望により中田中、香川景三郎両氏、私の代理として渡鮮、齋藤総督に会見して同日総督府にて写声講演会開会、続いて裡里大橋農場にて開会す。

さらに、同『旧紀要』第二号(昭和七年十月発行)には、次の二つが追加されている。

⑩大阪産業界並びに経済界立て直しの講演会、これは昭和六年九月二十一日大阪毎日新聞社長本山彦一氏並びに同顧問新渡戸稲造博士が目下の時局に鑑みられその平素における御両所の愛国の至情より積極的賛意を表せられ同社大講堂において開会せられた最も意義ある講演会にしてその結果大阪の産業界並びに経済界に及ぼす好影響実にも多大にして遂にモラロジー講習会を促すこととなり本年度に入りてはその結果更に測知すべからざる勢力を以てモラロジーと大阪の産業界、経済界と結び付く有様を形成しつつあります。

⑪昭和六年十月一日より本研究所次長広池法学士は本事業の傍ら国際通運株式会社の嘱託を受け同社従業員に対してモラロジーの講演をなすこととなり今日においては殆ど全国を一周し、各地における講演の結果は好良にしてその反響多大なるものあり。

(『旧紀要』第二号、六ページ)

このように広池自らがその成果を認めた講演会は、全部で十二を数えているが、本節では大正後期における主な講演会を中心としたモラルサイエンスの普及活動の方針に関して見ていきたい。

## (二)普及の第一歩を記した華族会館での第一回講演会(大正八年)

モラルサイエンスの普及活動として、まず最初に注目しなければならないのは、大正八年十一月二十二、二十三日の両日にわたって華族会館で開催された大木遠吉伯爵主催の講演会である。演題は、二十二日夜が「新科学モラルサイエンスの内容と、近き将来において世界各国に起こらんとする兆候ある社会革命との関係」であり、翌二十三日午後は「過去における社会教育の概要」であった。

この講演会の開催に先立って、すでに同年五月十二日に、広池もその会員として属していた斯道会の実務担当者田辺頼真氏に紹介されて、華族会館に大木伯爵を訪れ、国体の研究を講説している。その後の六月十七日より七月十八日の間、大阪にあつて連続講演会を行なっているが、心中では来る十一月の東京講演に備えてその構想を練っていたにちがいない。この華族会館での講演は広池の大きな期待がかかっており、まず上層階級からモラルサイエンスを知らしめ普及させようとの強い願望が込められていたのである。八月三十一日の日記には、「モラルサイエンスの完成と上流の布教をなすこと。布教の結果は講社または教会を設け、自ら統率するも苦しからず。また人にさするも苦しからず。この辺はすべて神様任せのこと。住所は東京を八分とすること」と記しており、ここにその後に向けた普及活動への構想を読みとることができる。

そして迎えた講演会の聴衆は二百人余りであった。主催者が大木伯爵で、会場が華族会館であったため、広池の期待どおり、集まった人々はほとんどが愛国の貴族、官界、実業界、軍人、政治家などであった。なお、さらにこの余勢をかってか、同年十二月十九日には、麴町内幸町の幸クラブで講演会を行なっている(同クラブでの講演は、翌年の六月二日にも行なっている)。

これら東京での講演会は、広池にとって将来の活動を占うものとの期待が大きかった。それは、年の瀬も迫った十二月二十一日に、聴衆の一人であった沢沢栄一翁を私邸に訪ね、講演内容の忌憚のない感想や批判を求めたこと、さらに翁に勧められて翌二十二日には岡部長景子爵の私邸を訪れて批判を求めたことによって明らかである。広池は、二日間の華族会館での講演と幸クラブの講演とによって、日本の指導者層の間にモラルサイエンス普及の第一歩を記すとともに、かなりの手応えを覚えて今後の活動に対して一層の自信を深めたであろうと推察される。

明けて大正九年一月十七日には、田辺頼真氏を同伴して、小田原の山県有朋公爵邸を訪れて、国体の研究や階級制度の合理性などについて一時間ばかり講話している。それに対して、同公から「根拠ある積年の研究、誠に御説の通りなり、云々。僅々一時間の御話なれど、多年研究の努力の有様分明に分かります、云々」といわれた旨を日記に書きとめている。

このようにして、広池千九郎は天理教本部とある一定の距離を保ちながらも、独自にモラルサイエンスの普及活動を開始したのである。しかし、その歩みは決して順調ということにはいかなかった。

このころ広池は、天理教そのものの布教からは徐々に身を引こうとしていたが、本部および信者に対する恩義を感じ請われるままに、その後も天啓などを中心に天理教に関する講演や講習を行っていた。そして九月よりは山陰地方、十二月よりは北九州地方と、相変わらずの巡回講演会活動もしている。そこには、病弱の身をかかえた広池の反省があったように思われる。すなわち、日記を見ると、この年から翌年にかけての病体の悪化は、広池の思想とその活動に対する神の試練となって、とくに大正九年の五月から六月にかけては激しい闘病とぎんげの繰り返しが見られる。

たとえば、五月三日には、前日來の精神上の立て替えを行なうとして、「上流人士への宣伝中止のこと。かえってこれらの団体に同臭味と見られたる時には、真理を傷つくるに至るべければなり。故にこの際、なお世を退避して、専らモラルサイエンスの研究に従事し、百世不易の真理を研鑽し、人類社会の平和幸福の基礎を確立のこと」と、モラルサイエンスの普及方針を変更するまでになっている。

しかし、モラルサイエンス普及の熱望はやむことなく、一か月後の六月二日には幸クラブで講演を行なって、再びモラルサイエンス研究所の設置についての思いを馳せるとともに、山県公や渋沢翁など上層部への開発を念

じている。そして、八月二十二日には、「大正十年よりモラルサイエンスに執筆のこと」として、出来上れば海外布教に尽力し、かつ教会と研究所を建設することを決心するに至っているのである。

### (三)華族会館での第二回・第三回の講演会（大正十年・同十二年）

さて、大正十年十一月二日には、田辺氏と同伴して大木伯爵を訪問して、第二回目の講演会について相談した後、七日には華族会館において大木伯と会食し、約四時間最高道徳について説明をしている。こうした下準備の上で、十二月十三日夜、華族会館において、大木伯爵・阪谷芳郎男爵・和田豊治・井上準之助の主催により、階級制度の根本原理と労働問題、社会問題、思想問題の徹底的解決法について講演している。この講演会も先回にもまして盛会を極めた模様であり、日記には上流人二百余人が参集したとある。また、大木伯開会閉会の辞を「博士は年来呢懇じっけんの間に篤学とくがくの士なり。研究完成に至らざれど、しかも内容充実、数時間の講演にて十分に悉つくす能わず。なお後日を期して御案内すべし」と書きとめ、次回への開催を期している。実際に、第三回目の華族会館での講演会が開催されたのは、二年後のことであった。

大正十二年七月十日には再び華族会館において講演した。このときには、知名の士が三十余名であった。その前の六月二十八日には大木伯爵を訪問して、講演のことについて相談しているが、今回の講演会において広池は、「伯を始め二、三人にても了解者の出ずるようによろしく」と記し、第三回目の講演会の開催に対しては、より深い理解者の出てくることを期待していたことが窺われる。この講演後の八月よりは、畑毛温泉に長期滞在し、「論文」の編纂に専念した。

なお、大木伯爵と並んで重要なのは、朝鮮総督府の齋藤実総督との接触である。広池千九郎は、大正十一年四

月七日より朝鮮へ渡り、六月二十日まで巡回講演を行なっているが、このときに初めて齋藤総督と会見した。総督の齋藤実子爵に面接したのは、四月十三日、十八日、二十五日および五月二十六日であった。これが後の昭和八年五月、首相官邸において親しく面談したり、また同十年十一月には、道徳科学専攻塾に招待し前首相として話をしてもらった布石となったのである。朝鮮滞在中、数度の講演や講話を各地で行なったのはもちろんのことであるが、今回の渡鮮は、モラルサイエンスの完成を期するためには、まず本島の支教会会長と年来の約束であった朝鮮・満州方面の布教を実行に移し、次には前管長の天理教教理の整理と体系づけを終わってからという心づもりがあったからであると推測される。

#### (四) 上流社会人への普及

大正十一年七月二十四日には、治定として、「いかなる万障を排しても、今年中に、皇室に最高道徳を入れ奉ること。このためには本部の御考へ通り、本部職員にあらずということに致すこと」を決意している。さらに、同年八月十四日には、「教祖、先管長の恩に酬ゆる心。天理教擁護の心。何としても皇室に対し奉りて、天祖の御徳即ち天理の御実行を御すすめ申し上げ候こと。第一期研究大成と同時に、上流救済の実を挙ぐること」とあり、上流社会人へのモラルサイエンス普及に対する並々ならぬ決意が記されている。

そして、上流人士に対する普及開発を実地に移すべく、たとえば同年八月二十日、二十一日の両日には、那須千本松に松方正義侯を訪ねて、「階級制度の根本原理について」会談している。二十一日には昼飯をはさんで五時間も対談したとある。

また、上層部への開発に關しての具体例として、伴達也海軍中佐へのアプローチが注目される。大正十二年四月二十八日夜、伴氏宅を訪問し話をしたのを始めとして、五月十二日にも同氏宅で第二回目の講話をし、さらに六月十四日夜には第三回の講演を行なっている。演題は「階級の原因に就いて」であり、聴講者には、海軍大佐森氏他に海軍佐官数名があったようである。こうした関係を発展させて、翌大正十三年十二月六日に、海軍大佐伴達也宅にて最高道徳実行会を設立し、第一回の講話を行なっている。この会の性格は不明ではあるが、上流人士に対する開発が実を結んだ一例を窺わせるものと見ることがができる。

#### (五) 普及方針の具体案（大正十一年、同十四年）

こうしてモラルサイエンスの普及が進められてきた中で、その普及方針についてわずか二人の近親者に示している。それは、大正十一年十月九日夜および十日に、嫡子千英と長女の婿木松氏（むぎのき）に対して、モラルサイエンス普及の腹案を開陳したことである。

広池は、「東京上流を助くるには、専ら最高道徳の効能普く知らしめることを得策とす。さするには、専らモラルサイエンスを標榜するに止むること。……」と話し始め、恐らくは深夜にも及んだのであろう。翌日には、結局、「学者としてモラル研究大成。平和実践家として人心救済をなすこと」として、モラルサイエンス普及の具体策について、次のように話している。

- (1) 上流に説き、ついに最上のところまで及ぼすこと。
- (2) 中流以下を救うために講を結ぶこと。……個人、社会の平和を目的とするゆえに、社交クラブ平和講と称す。

(3) 右の講社発達して、国の内外に拝信者を得、全社会を動かす力を生ずるように尽力すること。

なお、このことは、モラルサイエンスは大正十五年中に完成し、その間に上流にモラルサイエンスを説き、中流以下には天理教をもとに説明することと記した同年十月二十九日の決定にも見られる。

そして、大正十二年の年頭に、今後の道筋への確認(心定め)を記して、「皇室および上流を御助け申し上げたしと思ふ赤心のみ」と、いよいよ上層部の人々に対するモラルサイエンス普及の決意を新たにしている。なお、この年大正十二年四月十五日に天理教本部より神恵講設立を許可され、大正十三年四月二十三日には多年研究してきた天理教教理の原稿を書き上げて本部に提出している。そして同年の九月二十一日の日記には、「一方は純学術的教育的にて人心救済をし、深き人心救済は神恵講に集中すること」を天理教本部に申し出ている。

翌大正十四年五月十五日、天理教本部の理解者や恩のある人々に対して心を尽くして奉仕することを決意するとともに、「神恵講の人々を心を尽して愛育すること。今後永久に神恵講の人々へは、一般の人々と同じく、研究所の方にて一般的教理を仕込むこと。但し人心救済の深き心を造るは講の方にて、教祖ならびに予の信仰上における深き苦勞の精神を仕込むこと」としている。このことは、モラルサイエンスは一般人を対象とした教育に役立て、他方、その理解者の中でより深い救済と実践は神恵講でと、両方の道筋をもった活動方針を立てていたことを示すものである。

大正十四年六月以降、各地の温泉で療養しながら研究を続け、やがてその完成の日も見通しがついたころの大正十四年七月五日に、今後の普及方針として、次のように記している。

- 一、普及の方法は、まず少数の(皇族およびモラルサイエンス関係者)上流には進呈のこと。
- 一、一般社会知人を通じて漸次に拡むること。
- 一、英文は各国の大使、公使に手紙を添えて、十部ずつほど進上して本国へ送ること。

一、新聞、雑誌社にも寄贈せず。その理由は本書の性質として普通人の批評し得るものにあらざればなり。

一、研究室は出版と同時に東京に設けること。  
そして、同年七月二十七日には、「今一段聖者とならずば、モラルサイエンスに生命なきこと」と記して、身を引き締めるとともに今後の活動への意欲を高めている。

こうしてモラルサイエンスの普及方針を固めていくとともに、大正十五年三月よりモラルサイエンスの謄写版印刷を開始した。八月十七日にはその謄写版印刷の初版の完成をみて、広池はこの日をモラロジー研究所の創立記念日とした。また、同年十月には、モラルサイエンス研究所およびモラロジーアカデミーの構想を立てており、そこにはいよいよ本格的なモラロジー普及活動の到来を感じている様子が窺い知れる。

#### 四、昭和初期における社会と教育状況

昭和初年は、政治・社会・経済の各方面において、いよいよ悪化の方途をたどり始め、あたかも暗雲のただよいを思わせる時代であった。関東大震災によって拍車をかけられた戦後恐慌は、都市農村における失業者、潜在的失業者を激増させ、生活の疲弊と不安は、多くの労働争議、小作争議を誘発した。こうした社会不安と資本主義経済の歪みを背景に、社会主義思想が急速に普及し、学生運動や労働運動が活発化して反社会体制運動が大きくな展開を見せた。

この社会不安の深刻化にともなう国家体制のゆらぎを抑止する方途として、治安維持法の改正、特別高等警察の設置など治安警察制度が整備されると同時に、教育制度上にも国民の意識の「健全化」を促進するための方策、農村に対しては自力更生を標語とした善導教化政策がより強力に推進されることになった。とりわけ、「国民精神



の作興」は、昭和初年における教育政策の最大かつ緊要の教育目標であり、それは学生生徒に対する「思想善導」策として、また一般成人に対する教化動員運動として具体的に展開されていった。ここでは、社会教育諸団体を通じて一般成人に対する「教化」政策も推進し、「教化動員」運動が政府の主導によって全国的に繰り広げられ、各市町村に教化網がはりめぐらされていったことに注目しておかなければならない。

昭和四年七月に成立した浜口内閣は、緊縮財政の確立と国民の「思想悪化」傾向に対する抜本的対策の樹立を緊急の課題としていた。政府は社会一般を広く包括した全国的「教化」運動を自ら率先して展開することによって、国民間に共通の精神基盤を形成し、難局を切り抜けようとした。文部省では、七月に昇格拡充された社会教育局にその運動推進の中核を置き、同年八月には教化動員に関する計画を発表し、各方面に配布して協力を求めた。同計画によれば、その二大目標は、「団体観念を明瞭にし国民精神を剛健ならしめること」と「経済生活の更新を計り国本の培養に努むること」であった。そしてこれらについて、一般国民の自覚を喚起し鼓吹するために、教化団体、青少年団体、在郷軍人会、婦人団体、宗教団体など社会教化機関を総動員して教育・宣伝活動を全国的に展開することとした。もつとも、折から来襲した世界恐慌は、国民生活に深刻な打撃を与え、この運動が掲げた一方の経済生活の改善、勤儉節約の目標は有名無実となり、団体明徴・国民精神作興のみが運動の特色となっていた。昭和四年十一月の教化総動員週間には、ラジオ放送を通じて教化講演(寛克彦「皇室と皇国」、辻善之助「皇室御歴代の聖徳に就て」、嘉納治五郎「国民道徳の根本原理」など)を行なうとともに、各地で講演会を開催したり、リーフレットやパンフレットなどを配布した。

この教化総動員運動には多数の社会教育関係団体が参加したが、その中心となったのは、中央教化団体連合会であった。同連合会は、国民精神作興詔書が出された翌年の大正十三年一月十五日に、その趣旨を国民間に普及させるために一木喜徳郎を会長にして結成・発足したものを前身として、以来、政府の助成を受けて全国的な活動を続けていた。連合会は、全国各地で国力振興講演会を開催し、同十三年十一月十日・十一日には、東京芝公園協調会館で第一回全国教化団体代表者大会を開いたが、そのとき、

- 一、 団体観念の明確化と敬神崇祖の念の涵養
- 二、 同胞相愛精神をもとにした国民意識の涵養と模倣文化の追放
- 三、 利己主義の排除と公共精神の育成
- 四、 勤勉儉約のすすめと生活改善の実行

を決議している。

初期の連合会は、教化指導者の育成に力を入れ、大正十四年から教化事業講習会(昭和七年からは教化関係幹部講習会)を開くとともに、教化事業関係者懇談会を各地で開催し、教化団体の結集を促進した。

そして昭和三年四月には、中央教化団体連合会と改称するとともに新たに組織を拡大した。会長には山川健次郎(昭和六年からは斎藤実)、理事には上田万年・桑田熊蔵・斎藤実・岡田良平・加藤咄堂ら、顧問には一木喜徳郎・安達謙蔵、参与には連沼門三・留岡幸助・嘉納治五郎・丸山鶴吉らが名を連ねている。その傘下には日本弘道会、中央報徳会、愛国婦人会、東京基督教青年会・女子青年会、中央仏教会、全国神職会、生活改善中央会などが組み込まれた。当時すでに約八百九十の教化団体を傘下に収めたといえ、なお未組織な所があったため、教化団体の性格を「国民生活の道徳的向上を目的として健全なる思想を養い、社会の改善を図るものを謂ふ」と定義し直し、より広い範囲にわたる教化団体の参加を求めたのである。

さらに、文部省は昭和五年四月に各地方長官あて通牒を發し、各市町村に教化機関を設置するよう指示し、全

国的な「教化網」の完成を企図した。ときに昭和五年は、世界的恐慌、米価・農作物が大暴落し、農村の危機が深刻化するとともに、労働争議が続出し、失業者が約四十万人といわれる時代であった。

こうして経済と道徳の調和を方針とした教化総動員運動は、各市町村に張りめぐらされた教化網を通じて、昭和十二年に始まる国民精神総動員まで引き継がれていったのである。

◇参考

・前掲『日本近代教育百年史』第一巻、二七五～二七六ページ、二八九～二九〇ページ、三一九～三二三ページ。

・前掲『社会教育概論』、三八～三九ページ。

・岡本包治・山本恒夫編『社会教育講座』第一巻、第一法規、昭和五四年、一八五～二〇二ページ。

五、昭和初期におけるモラロジーの普及活動

昭和になって、広池千九郎はモラロジーの普及活動に本格的に取り組んで行った。すなわち、『論文』の脱稿後に続いて各種のテキストを著述し、来るべき社会教育の準備を整えて着々とモラロジーの普及に意欲を高めていったのである。しかし、このときの広池はなおも天理教の一信徒であり、本部の教導職の立場にあった。そこでその色彩をとどめていた神恵講における活動と同時に、他方では、モラロジーの普及活動において天理教からの独立を期していたのである。

(一)独自のモラロジー普及活動への第一歩

昭和二年一月二十九日、東京中野に設けていた神恵講を「報恩協会」(プロテューティ・ソサイティ)と改称して渋谷に移転し、二月一日にはそこで講話を行なっている。これは志を同じくする者を教育しながら最高道徳への理解を深める活動を始めたことを物語るものである。

そして、昭和三年三月から『論文』の印刷にかかるのを機会に、先の大正十二年四月十五日に下付され救済に従事していた神恵講を、宗教の弊害が多いこと、中流以上を救済することの困難なためを理由に、その神恵講および教導職を辞職することとした。昭和四年一月二十一日に教導職辞職願と神恵講返納願の手續をし、同月二十四日には返納受理の指令と書面を得た。その日の日記には、「教導職辞職聴許、神恵講返納受理の指令および書面来る。これにて一落落」と記している。ここにおいて、広池は天理教本部および教会に関係なく一人の天理教信者に帰ることとなり、モラロジーの普及に当たっても広池独自の進め方によることとなった。長年の懸案がここに一応の解決を見たわけである。

まず、昭和三年十一月三日には、『論文』の印刷完成報告のため報恩協会の同志を引率して伊勢神宮に参拝し、「第一五十鈴河畔の教訓」を發している。これは、広池が独自の活動を起こしていくという意志表示をしたものであった。そして、十二月十三日には、門弟となった十三名を集めて、将来のモラロジー普及の方針を話す一方で、同月十七日には、白鳥、新渡戸の両博士を東京会館に招待して、将来全世界にモラロジーを普及するについての相談をしている。

## (二) 皇室および上流人士への「論文」の献本と講話

昭和三年十二月二十二日、待望の『道徳科学の論文』の製本が出来上がり、そのうちとりあえず十五部を受領して、早速主な人々へ納本している。翌日二十三日には、一木宮内大臣邸、関屋次官官邸、さらには鎌倉滞在の牧野内大臣を次々と訪問して、それぞれ一時間にわたって話をしている。また二十六日には、秩父宮御殿にて前田事務官に面談のうえ約四十五分間話している。次いで松平大使宅、久邇宮邸で山田事務官に面談するなど、さらには同月二十八日に、秩父宮、高松宮、久邇宮、閑院、伏見、梨本、李王殿下へ献本している。これは先の方針通り、皇室関係者と上流人士に対する普及であった。

明けて昭和四年の元旦を迎えて、いよいよモラロジー最初の著書の発表に胸躍る気持ちを抑えかねるようになり、『論文』を皇室並びにその周囲の大官に配本し、さらに陸海軍首脳部に話をするこの決意を示すとともに、実行に移している。

まず、三月五日に一木喜徳郎官相を訪問しているが、そのときの日記には、「一木殿は子に向かいて、先日鈴木侍従長より御陪食の席にて、モラロジーの話が出て、已に暗に上聞に達せしとのこと御話あり」と、非常に満足な思いが記されている。

三月八日は、両陛下、皇太子陛下に『論文』を献上するために宮内省に出かけている。翌九日には「帝国学士院の連中へ配本」とあり、学会関係者にも配本していることが知れる。

またさらに、四月二十八日には、一条実孝公爵に伴氏を伴って訪問しているが、このときにも、自ら日記に次のように記している。「この日は荒木中将と公爵と御所にて御きき下さる。公爵は中飯の時、公嗣子(令夫人付き添い)に『御酌をせよ。かかるえらい御方にあやかるために御酌をせよ』とて、予に御酌をする。思うに公爵

は、天爵の人爵より尊きことを公子に知らせて、万世一系の公爵家を無窮につづかせんためなり。公爵は実に現代に得易からざる賢人なり」と。この記事は、広池にとって上層の人々にモラロジーの理解者を得ることのできた思いが伝わってくる文面である。そして、この日の公爵邸における話は約五時間にわたっている。広池は、この後にも六月十七日および二十日にも公邸に訪問し会合している。

さらに一条公爵には、六月二十四日夜に公邸に鈴木侍従長、奈良武官長をも招待して広池の話を聴かせている。このときの模様的一端は、「実に今夕の会合は、日本国体上歴史的事実として特記すべき重要時たるを覚ゆ」ということから知れよう。広池千九郎にとって我が春の到来を感じた思いがしたのである。うし、かつ将来への活動に絶大なる力添えを得た思いであつたらう。その数日後の六月三十日、広池は一条公へ「今日の状態は鎌倉公の時代より重大なる困難の時代なることを説き、今後毎月二回、小生御話を致すべきこと」という書状を送っている。

## (三) モラロジー講演会の開始

モラロジーの最初の講演会活動は、昭和三年十月二十五日に東京の日本工業倶楽部経済会においてのものであった。「階級制度の科学的研究および労働問題の科学的解決法」と題する講演は一時間四十分にあつた。この時の聴講者の中には、中島男爵や中野金次郎が含まれ、また講演後の会食の席には早稲田大学の塩沢博士の姿があつたと記されているが、大正後期での講演会とはその聴講者を異にして、経済界の人々の参加を得てきたことが注目される。

また、同年十二月二十七日には、鈴木貫太郎海軍軍令部長の主催で大佐以上十五、六人に、翌日二十八日には、畑第一師団長の主催で司令部において、中佐以上二十五、六人に対して講演を行なっている。これは先の方針(十

二月十三日)で、陸海軍に力を注ぐという方針を実地に移したものと考えられる。なおさらに、翌昭和四年二月二十六日および三月二日には、海軍大学にて講義している。

他方、昭和四年に入ると、実業界の人々、その他一般を対象とした講演または講話も各地で盛んに行なっている。主なところを日記から拾ってみると、次のようである。

一月二十四日 梶芳助氏主催にて別紙招待状により御講話せらる。来聴者は主として実業家、工場主等にて、約六、七十名。御講話の内に「今回の結果、排日問題についても政府の処置に不備の点あらむも、深因は従来日本殊に大阪の商工業家が、かねてより粗製品を輸出せし不道徳に原因せるところ大なり」との御一言に、一同感して拍手起こる。……

四月十三日 出雲村長を首め、九か村村長の発起にて御講演あり。聴講者約二百名。

七月二十一日 岡谷公会堂にて御話(労働問題の道徳的解決に就いて)。……聴講者約百名。

八月二十五日 長野県産業組合夏期大学へ出演……博士御講演あり。

八月二十六日 岡谷実業クラブにおいて、……博士お話(因果律に就き学問的に、また実例を挙げて)。聴講者大いに感ず。

九月一日 去月二十五日、夏期大学における御講演に感激し、長野市庶民信用組合より同組合員に御講演願いたい旨申し込みありしをもって、……御講演あり。聴講者約五百名。

九月二十四日 合同運送会社市内本店、從店重役、都合百名ばかりに、東京工業クラブにて御講演遊ばさる。ここで、モラロジーに関する講演会で注目すべきものは、翌年の昭和五年二月十九日に開催された日本工業俱樂部での講演である。演題は「労働問題解決の原理、並びに労働組合法制定の可否について」であり、東京財界

人四百余名が参集したとある。大川平三郎、藤原銀次郎、白石元治郎、中野金次郎といった主催者側の顔触れからも知れるように、この講演会には当時の実業界のかなりの数を集めた盛大なものであった。この模様について「午後五時より工業俱樂部において御講演遊ばさる。聴講者財界の巨頭朝野総一郎翁、大川平三郎氏始め四百人に達す。中野国際通運会社社長の開会の辞に始まり、先生御講演一時間に及ぶ。最後に大川平三郎氏立ちて感謝に満ちた挨拶をなし、光輝ある博士の御講演に一層色彩を添え、全員感激のうちに午後九時閉会す。当日の博士の御話を伺いて、東京鉄工機械組合長大塚氏のごときは、今まで手元に進呈しておいた『孝道』の本を読まなかつたのに、翌日より熱心に読みはじめたとのこと。この一事より推察するも、いかに博士の講演が、否博士の人格が偉大なるかは良く諒解出来るのであります」と、側近者によって日記に記載されている。

この年はさらに、六月二十六日の長野県岡谷の片倉会館にて県下の製糸工業主を主な対象者とした講演、十一月十六、十七日には大阪開発の端緒となった講習会が、大阪玉出工業協和会主催で西成区役所において開催されている。

明けて昭和六年一月には島根県松江市において講演し、この地方の開発の端緒となる。次いで九州に入って福岡から鹿児島まで足を延ばしているが、このころ病気が重くなってきた。その静養のため、五月には長野県下の温泉に戻り、さらには新潟県栃尾又温泉にたどり着いている。五月九日から二十三日までそこに滞在し、すっかり疲労しきった身を湯につけ、その苦しさに神に延命を願った期限が迫っていたことを思い出していたに違いないことは、次のような辞世に似たような句から推察できよう。すなわち、五月四日には、「我身今神の御傍にかへるとも誠の人をいかで見捨てむ」、また二十一日には、「我身今日神之御傍にかへり行きて誠之人を永く守らむ」と詠んでいる。

#### (四)モラロジーの普及方針（昭和六年）

その後病状は回復に向かい、昭和六年七月二十二日から二十四日にかけて霧積温泉でモラロジー講習会を開催している。京浜中小工業家に対するモラロジー講習会で、参加者は四十五名あった。このころから横浜や大阪にソサエティの開設が許可されている他、各地に開発の端緒を開いている。これはモラロジー普及活動の全国的な高まりを示すものである。

そして、同年八月十二日の日記には、来る大阪講演会に新渡戸博士の快諾を得たこととともに、この春の栃尾又での大患に際して次のように今後のモラロジー普及・開発の具体案を記している。

一、洋行はただモラロジーの名を弘むるだけの仕事にして……洋行するにしても、昭和八、九年頃まで延期することと決定す。

二、ソサエティ在来の会員の心を今一段深く救済する必要あり。而して日本人間に鞏固なるモラロジーの精神団体を造ることが世界救済の本なり。故に神様が小生の生命をお延ばし下されば、当秋より大阪を始め全国各地に救済の手を延ばすべきことを決心す。

三、最高道徳はたとい四圍の評判の如何によらず、先天の徳あるものはこれに帰依し、徳なきものは……理解し且つ実行するものにあらず。故に予自ら洋行してモラロジーを講ずるとか、上流社会や大資本家を説き廻るとかいうことは、さして益あることにあらず。ただ至誠心をもって中流社会の人々を目標として進むことが、真に救済の基礎を確立する方法ならむと覚悟を定む。

さらに、「さすれば大正元年より今年までに二十年間がモラロジーの第一期建設時代にして、昭和六年は更にその第二期建設時代の初年になるものか。記してもって後日に徴す」と記している。これは、まさにこの年から本

格的なモラロジー活動の幕明けを宣言するものである。時にこの年、広池千九郎はすでに六十六歳の老齢に達していた。

そしてついに、九月二十一日、大阪毎日新聞社講堂において「新科学モラロジーおよび最高道徳と大阪の産業界および経済界の立て直し」と題する講演会が盛大に催されたのである。これ以降、モラロジー普及活動の主力は講習会の開催と専攻塾の建設に注がれていったのである。

#### 六、まとめに代えて

以上、『広池千九郎日記』を通して知られる大正末期および昭和初期のモラロジーの普及活動の変遷を見てきた。はじめに記したように、広池は当時の日本社会の上層部の人々に向けてモラロジーの普及を図るとともに、広く一般社会の人々を対象として思想の善導を進めることが急務であると考えていた。このことは、次のように記していることから明らかである。

最高道徳においては聖人の御教えをもって世界人類の精神を開発し、かつこれを救済することをもつて目的としておるのであります。……真に開発されたるものはその精神が最高道徳的に生まれ変わって来るのであります。すなわち神に救済されるのであります。……しかるに、神に救済されることは極めて難いのであります。そこで、一般の社会教育もしくは学校教育においてはやむを得ず、最高道徳の要点を知的に説明し、最高道徳によりて行動することは他の因習的道德、因習的信仰もしくはその他の主義によりて行動するよりは自己ならびに一般社会に利益ありとのことを覚らしむる方法を採用することもあるのです。すなわち最高道徳をもって単にいわゆる思想善導をなすのであります。されば、人心救済は最高品性を有する最上の人間

をつくることを得れどその人数が少ないのでありますが、思想善導は個人の道徳心は浅いにしてもその感化を受ける人間の数が非常に多くなりますから、国家もしくは社会を益することも甚だ大きいのであります。故にモラロジーの教育においては、人心救済と思想善導とを併わせ行いつつあるのでございます。

〔新科学モラロジー及び最高道徳に関する重要注意〕『復刻版広池千九郎モラロジー選集』第三巻、三七―三八ページ。ただし、現代文表記に改めた。

この記述から広池は、深い救済ではその数を増やすことが困難であるため、一方ではいかに浅くてもより広く開発することの重要性を考えていたように思われる。もしそうだとするならば、先に見たように、当時国を挙げての思想善導教化の状況においては、モラルサイエンスおよびモラロジー普及活動はやり易い面をもっていたのではないかと思われる。しかし広池は、そうした時代の国家的な思想善導教化の運動や教育活動にはほとんど組み込まなかった（教化団体連合会の責任者であった一木喜徳郎や斎藤実らとは個人的な交流があったものの、その教化活動への具体的な影響は認め難いように思われる）。当初は、もっぱら皇室はじめ政財界首脳部をその普及の対象とした。

だが、その対象も広池の予期するところにあらずと考えたのか、前節に見たように、のちの昭和六年八月十二日にはその普及方針に大きな変化が認められるに至っている。すなわち、モラロジーのより深い理解と最高道徳実行に誘う対象は中流社会の人々であるとしたのである。

そして、とりわけ最高道徳の社会的普及には個人的教育法によらなければならぬことを痛感していた。このことは『論文』の次のような記述からも明らかに読みとれよう。

最高道徳における人心救済は学校教育もしくは従来における社会教育の団体的教育法によらず、個人的教育法によるのであります。すなわち真の最高道徳の実行者にして神に救済されたる人が、ある他の人に対し

親しく卓を囲みて、徹底的に回を重ね、詢々としてその人の心をその相手方の心に伝えて感化するのであります。それ故に、最高道徳の社会的普及の方法は、この最高道徳を聴く人全部が、たとい一小部分ずつにても実行して、その実行したことを、一定の順序のあるはずはなけれど、まずその家族の精神に移植し、それから漸次にその親族・友人・先輩・後輩もしくは使用人等に及ぼし、更にその次に至って、これを一般社会に及ぼすのであります。〔論文〕⑧、一九五―一九六ページ

次に功利的に最大多数の人に最大幸福を与えんとする人もあれど、これただ言うべくして行なわれざる空言にすぎぬのです。最高道徳はいかなる場合にも、ただある一個人の心を救済することを目的としております。一人真に救われるれば、自分とその人と二人にて他の救済に従事すべく、かくのごとくにして一人ずつ救われていけば、ついに多数に上るのです。その自然の結果は確実に最大多数人に最大無比の幸福を与え得るに至るのであります。〔同右書〕⑧、二八八ページ

しかし、これは人を選びかつ時間をかけなければならぬ非常に困難をとまなう事業である。現に、広池も真に救済される人は極めて少ないとして、次のように述べている。

自己の救済さるるといふことは、真の慈悲心が起こり、かつその伝統ということに重大な意味のあることが理解され、かつ感激的にその精神的伝統を自分の救いの親と思うまでの深い念が起こってくることを意味するのであります。しこうしてこれがためにはいかなる犠牲をも払い、一家の生命をも捧ぐる底の決心を有するに至り、その心に基づいてその低い、優しい、慈悲な真の至誠心を他人の心に移植して、他人を救済したいという心になることであるのです。しかるに多くの人々は最高道徳にて知的に開発さるるまでに進むものはあれど、真に救済さるるまでになる人は暁天の星より少ないのであります。

これに関連して、門弟の一人の次のような記述はこれを補うものであらうと思われる。

(博士が) 全国を十数年間講演をして回り、どこでも聴衆が感激したのですが、感激は一時のもので続かず、真に救われた人は生まれません。それほど感激された人があるのに、博士が『道徳科学の論文』を完成された昭和三年には、会員わずか六名であったと博士は日誌に書き残されてあります。

昭和六年のことでした。博士がしみじみと昔を偲びながら、

「私は十数年間、全国を講演して回り、幸福になる！ 助かる！ と、話して回ったが、講演のしっ放しで個人を丁寧に救済していない。これでは生んだ子供を育てず、捨て子や里子にしたと同じで無慈悲であった」と、お話し下さいました。(松浦香『救われた心』、広池学園事業部、昭和四十九年、一三三―一三四ページ)

筆者は、現在のモラロジー教育活動において集団的開発と個人的開発(救済)のどちらに力点を置くべきかについて意見の相違が見られることにおいて、さしあたりは、広池千太郎現モラロジー研究所所長が昭和五十年の参与研修会講話の中で、次のように述べていることに注目しておきたいと思う。

元来、思想団体の中には二派あり得るものです。それは、高さ、深さを追求する本質派と、高さに対して裾野の広がりを求める社会派です。ウチの場合ですと、団体全体の文化レベル、価値レベルを上げるといふ価値志向性、方向づけが必要であると同時に、一方では広がりが必要です。例えば、砂を落として山をつくる場合、裾野が広がらなければ山が高くなるように、一方では高さを求める価値志向性、一方では幅を広げる方向づけ、両方が必要です。思想団体、精神団体の常として両方ありますので、そういう点で、両方を達観する一段上の立場になって、ワンサイドに立たないということが必要じゃないかと思えます。……

昨今の世相を見ますと、思想の問題は極めて重要です。ですから、皆さん方が人心開発救済に従事される場合に、目標を個人の幸福の追求にだけにとどめないで、その先まで設定して、日本の国民を思想的に守るというところまで広げ高めて頂きたいと思うのです。換言すれば、個人の範囲に終始する人心の開発が、国家的要請、国民的な課題、思想の善導につながっていくことを考えてお進め頂きたいのです。こうすることによって、この人の人心開発が社会的な意味合いと役割を持つものとして作用してきます。……われわれの人心開発を個の完成というか個人の幸福追求だけに終わらせないで、思想的なものとして形を与え、思想善導にまで持つて行くことが、国家的な、社会的な役割につながっていくのです。また、こうすることによって若い世代とも協同できるのだと思えます。(『モラロジー研究所報』、昭和五十年九月一日)

現在のモラロジーの一般社会への普及と教育活動においても、右に見られるところの活動の方向性について同じような問題を抱えていると言えるのではなからうか。結論的には、先に引用した現所長の言説に妥当性を見出すべきものとしても、本稿において、広池千九郎自身のモラロジー普及の歩みをたどって見たことが、この問題を考える際に示唆するところのものがあればと思う。